

ドメスティック・バイオレンス被害女性の ロールシャッハ反応

井村 弘子

要 約

本稿は、長期間ドメスティック・バイオレンス (DV) 被害を受けてきた一女性の心理的状态を、ロールシャッハ・テストを通して詳細に検討したものである。ロールシャッハ反応の分析結果から、①純粹形態反応率 (F%) の低さ、②非生物運動反応 (m) の多さ、③総良形態反応率 (R+) の低さ等が認められ、これらは先行研究で指摘された心的外傷後ストレス障害 (PTSD) の反応特徴に一致した。その一方で、①特殊部分反応 (Dd) の多さ、②安定した感情統制力 ($FC > CF + C$)、③両向的体験型、④公共反応 (P) の適量産出といった本被験者のパーソナリティ特性や、回復への手がかりも認められた。これらの結果を踏まえ、DV被害とPTSDとの関連、DV被害女性の心理的特徴、DV被害からの回復に効果的な心理的援助について考察した。

キーワード：ドメスティック・バイオレンス (DV)、ロールシャッハ・テスト、PTSD
(心的外傷後ストレス障害)

1 問題と目的

ドメスティック・バイオレンス (domestic violence ; DV) を文字通りに訳すと「家庭内暴力」であるが、一般的にDVとは配偶者 (事実婚の相手も含む) や恋人など親密なパートナーからの身体的・精神的・性的な暴力を指し、女性が男性から被害を受ける場合がほとんどである (友田, 2005)。わが国では2001年に「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律」が制定 (2004年改正) され、DVに対して警察の介入、裁判所の保護命令 (接近禁止命令・退去命令) が定められるなどDV被害者を法的に守るしくみが整えられた。また、都道府県に配偶者暴力相談支援センターが設置され、DV被害者の一時保護や相談・助言等が推進されたことでDV問題は顕在化しやすくなった。しかし、DV被害者がDVから脱出した後、心身の健康を回復するまでの継続的な支援体制については十分とは言えない状況にある (戒能, 2006)。

DVは、殴る・蹴るなどの身体的暴力、脅迫・威嚇・暴言や行動監視などの精神的暴力、

性行為の強要などの性的暴力のほか、居所の追及・経済的抑圧等、複合的な暴力被害の集積であることが多い (柳田他, 2004)。また、DVは家庭という閉ざされた私的空間で生じ、孤立無援の状態ですべて支配・屈従関係が継続するだけに被害の長期化を招きやすい。日常的に暴力を振るわれ、自分の価値や尊厳が踏みにじられるような状況に長期間晒されたDV被害者は、心身に深刻な傷を負い、恐怖で無力化されて自分を大切にしようとする気持ちを失っていく (小西, 2001)。たとえ加害者のもとから逃れ、とりあえず身の安全が確保されたとしても、それまでの複合的な暴力被害の後遺症がDV被害者を苦しめることになる。その典型的なものがPTSD (Posttraumatic Stress Disorder ; 心的外傷後ストレス障害) である。

PTSDは不安障害の1つで、生命に危機的影響を及ぼす出来事に晒されたという事実と、強い恐怖・無力感・戦慄といった体験が発症に関わっており、①侵入 (再体験・悪夢・フラッシュバックなど)、②回避・麻痺 (外傷の

記憶を呼び起こす場所・人物・活動等の回避、諸活動への無関心など)、③過覚醒(不眠・過敏・集中困難・過度の警戒心など)が主症状である(APA「DSM-IV-TR」, 2000)。

PTSDは、戦闘、性的暴行や身体的攻撃、誘拐・人質・監禁などの恐怖体験、自然災害、突然の事故などが発症の契機となるが、日常生活の中で長期間にわたり暴力被害が繰り返される虐待やDVの場合は、複雑性PTSD(Complex PTSD, Herman, 1992)に罹り、被害者は上記のPTSD症状に加え、うつ状態、自殺念慮、非現実感、孤立、情緒不安定、無力感、加害者の理想化、他者不信、絶望感などを起こし、自己評価は極端に低下する(小西, 2001)。PTSDは適切な支援・治療により回復が期待できるが、複雑性PTSDになると症状が長引き、固定・慢性化して改善が難しくなるため、できるだけ早期に安全を確保し、心身の回復を図っていくことが重要である(小西, 2006)。

不適応状態の人に臨床心理学の理論と技術を応用して働きかける心理臨床の過程は、その人を理解するための心理査定(アセスメント)と、治療や処遇を含む心理的援助(心理療法)の2つの過程に大別され、効果的な援助を行うためには適切な査定が不可欠である。心理査定は、生育歴聴取、行動観察、面接、心理検査などから得た情報を総合して行われるが、このうち心理検査は対象者のパーソナリティ理解の客観的な方法として多方面から開発されてきた。その中でも、対象者への心理学的アプローチの経過に関する予想・予後の見通しなどの見立てについて有効な情報をもたらすのは、ロールシャッハ・テストの所見である(氏原, 2001)。

ロールシャッハ・テストは、10枚の漠然図形(インクプロット)を被験者に提示して何に見えるかを問い、その反応産出過程に被験者のパーソナリティ構造が投射される人格検査法である。知覚・判断するインクプロットが曖昧であるために、個人的な内面が投射されやすく、また、テストの実施が2段階(自

由反応段階・質問段階)に分かれ、自己の内的な心の動きを他者(検査者)に言葉で伝達する過程を含むところに特徴がある。ロールシャッハ反応を構成しているのは、反応領域・反応決定因・反応内容・形態水準の4側面であり、それぞれ記号化されて分析の対象となる。反応領域は、目の前に差し出されたインクプロットにどう関わり、どう処理するかといった被験者の外界適応の様式を表し、反応決定因には、インクプロットの様々な要素をどのように体験するかといった意識的・無意識的な体験の仕方が示される。また、インクプロットを何に見立てたかという個人的連想が反応内容に表現され、その過程に被験者の冷静な現実吟味・検討力がどの程度働いているのかを知るための指標が形態水準である。これらの情報を総合すると、馬場(1995)が指摘するように、被験者の日常生活での心理的健康と障害のあり方が推測され、症状や不適応行動の背景に関する力動的理解や、よりよい生き方への助言、心理的援助(心理療法)の見通しなどが可能となる。

本稿は、長期にわたりDV被害を受けてきた一女性のロールシャッハ反応の詳細な分析結果から、DV被害女性の心理的特徴、DV被害とPTSD症状との関連、本被験者の回復と自立に向けた心理的援助の手がかり等について検討することを目的とする。

2 事例

(1) 被験者の概要

A子(40代女性)。高校卒業後、数年の就労経験を経た後、夫と知り合い結婚。以後、約20年間、夫のDV被害(殴打・威嚇・脅迫・異性関係の疑念と行動監視・性行為の強要等)を受けてきた。生活困窮で福祉事務所へ相談した際、打撲痕からDV発覚。相談員の介入で離婚成立。離婚後も元夫に付きまといわれDV継続。安全確保と自立支援のため、相談員の勧めで母子共に生活できる施設への入所となる。その後もA子は元夫に呼び出されては施設外で暴力被害を受ける。A子の心情・行動の安

定と自立支援を図ってほしいという施設の要請により、筆者（施設嘱託臨床心理士；CP）との継続面接が開始した。

(2) 面接過程

第1期（# 1～# 15；X年3月～X年7月）

安全確保を最優先とし、施設全体で安心感を与えながら自分を大切にしよう働きかけた。その間、CPは断ち切れない元夫への思いを受けとめた。

第2期（# 16～# 33；X年8月～X年12月）

元夫との接触を断つ。不眠・不安・倦怠感が高じ、嘱託精神科医が対応。心身の不調時には職員による家事支援を継続。心身不調とDV被害との関連、回復の見通し等についてCPから説明。元夫からの再三の脅迫にもめげず、自力で子どもの生活を守っていこうという気持ちが芽生えてきた。心理査定はこの時期（X年10月）に実施した。

第3期（# 34～# 42；X+1年1月～X+1年8月）

自ら興味を示した職業講習会に参加。取得資格を活かしたパート勤務体験。徐々に主体性を取り戻す。

第4期（# 43～# 53；X+1年9月～X+2年4月）

本格的な就労へ移行。退所を前に不安感が再燃したが、子どもと共に自活への決意を固めた。最後に、2年間の自分自身の変化を振り返った。

(3) PTSDの診断基準と被験者の症状

面接過程第2期においてA子が呈した症状を「DSM-IV-TR」（2000）の診断基準に沿ってまとめたものを表1に示した。

PTSD症状の評価については、「IES-R；Impact of Event Scale-Revised（改訂版出来事インパクト尺度）（Asukai et al, 2002）」（PTSDの3大症状である侵入、回避・麻痺、過覚醒症状を下位尺度とした22項目からなる質問紙。25点以上がPTSDハイリスクと診断）を実施。

1回目（X年10月）の「IES-R」得点は49（侵入18、回避・麻痺13、過覚醒18）、2回目（X+2年4月）には22（侵入8、回避・麻痺7、過覚醒7）と減少していることから、退所時にはPTSDは軽快したものと考えられる。

表1 DSM-IV-TRのPTSD診断基準と被験者（A子）の状態との対応

領域及び症状	被験者（A子）の状態
A. 生命に関わる危険な出来事を、一度あるいは数度体験・目撃・直面。その反応は、強い恐怖・無力感・戦慄に関するもの。	元夫の暴力（警察署同行・病院受診）、つきまとい行為（体験・目撃）。恐怖心と戦慄。
B. 外傷的な出来事の再体験（反復的・侵入的・苦痛な想起・悪夢・フラッシュバック等）。再体験による強い心理的苦痛、生理学的反応性。	元夫の顔が常にちらつく。思い出すと息苦しさ・震え、他の思考・行動の停止。
C. 外傷体験に類似した刺激状況の回避、外傷の重要な側面の想起不能、反応性の麻痺、社会活動の減退、孤立、離人感、幸福感の縮小。	外出できない。電話に出ることができない。家事がはかどらない。抑うつ感・倦怠感。
D. 持続的な覚醒亢進症状。入眠・睡眠維持困難。易刺激性、集中困難、過度の警戒心、過剰な驚愕反応。	寝つきが悪い。眠れない。すぐ目が覚める。集中困難。些細なことでびくっとする。
E. 上記B・C・Dの症状の持続が1か月以上。	症状の出現は X年8月から。検査時点（X年10月）まで2か月以上持続。
F. 臨床的な著しい苦痛や社会、職業等の重要な領域における機能障害を引き起こしている。	外出・家事労働が困難。外出時は施設職員が同行。家事は施設職員が一部代行。
該当すれば特定。症状持続：3か月未満は急性・3か月以上は慢性。発症遅延：症状開始がストレス因子から少なくとも6か月の場合。	PTSD（施設嘱託精神科医の診断）

3 結果

(1) 検査態度

現在の心理的状态を知り、今後の心理面接の方針に役立てたいという検査者の目的に同意し、検査には素直に応じた。最初は幾分緊張気味であったが、徐々に緊張は解け、後半になるに従い図版への興味を示した。検査には最後まで熱心に取り組み、特に質問段階では自発的に説明や追加を行い、検査終了時には、「見ているうちに(図版が)いろいろなものに見えて楽しかった」との感想を述べた。

(2) プロトコル・スコア集計

検査の施行・評定法は片口(1987)に従った。プロトコルは、表2に示したとおりである。表3にスコア集計を示した。

(3) 反応領域

全体反応(W)32%、普通部分反応(D)45%、特殊部分反応(Dd)19%、空白反応(S)4%であり、高橋(1981)が示した平均値と比較すると、Wが少なくDdが多い。物事を総合的にとらえるより、細かく分け具体的に眺める特徴があり、自分の考えにとらわれると些細なことへ関心を向けてしまう傾向が示されている。また、系統だって課題解決するよりは、目にとまったところから物事を処理していく傾向がうかがわれた。

(4) 反応決定因

純粹形態反応(F)は30%であり、高橋(1981)や片口(1987)が示した平均値より低い。物事を客観的にとらえる力がやや不足し、現実を主観的に見る傾向がうかがわれる。運動反応(M)数は6、動物運動反応(FM)も6であり、産出数は十分にある。知能や想像力、内的安定性や共感性等の面で問題はないと考えられる。一方、m(非生物運動反応)数は平均値を上回っており、自己を脅かすような内的衝動、非痛感や抑うつ感の存在が示唆される。色彩反応については、自然形態色彩反応(FC)が6、色彩形態反応(CF)が3

出現しており(純粹色彩反応Cは0)、 $FC > CF (+C)$ であることから、感情統制力や対人関係処理能力などに問題ない人であることがわかる。無色彩反応(C')は平均値より多く、抑うつ的で受動的な傾向が示唆される。陰影反応については、通景反応(FK)の出現数が多いことが特徴的であり、やや過度な内省力、自信のなさ、劣等感の存在等が推察される。体験型は $M : \Sigma C$ が6 : 6と均衡を保っており、両向型である。豊かな創造力や空想力と、外界への関心や感受性を両方持つバランスの良さが特徴的である。

(5) 反応内容

内容カテゴリー種類(CR)は12であり、知的関心や興味の幅については十分な広がりを持つ人である。また、公共反応(P)数は11と多い。常識的なものの見方ができ、周囲の人々と適切な関係を維持していける人であることがわかる。人間反応(H)は32%、動物反応(A)は34%であり、H%は平均値より高く、 $H < Hd$ (Hdはほとんどが顔の反応)であることから、人間関係に敏感な様子が見て取れる。解剖反応(At)が2つ産出され、うち1つは「死んでいる動物の骨」と表現された。内的な不安の存在が示唆される。また、性反応(Sex)が1つ出現し、「子宮(子どもが生まれてくるところ)」と表現された。H反応に「赤ちゃん」「胎児」も見られたことから、妊娠・出産や母性へのこだわり、性的関心や不安・葛藤等が内在していることが推察される。

(6) 形態水準

純粹良形態反応(F+)は50%、総良形態反応(R+)は55%であり、良形態反応が少ないことが大きな特徴である。反応の仕方を見ると、インクプロットと概念の間に作話や逸脱などの著しい不一致はないものの、やや独断的で質問段階での説明や明細化が不十分な反応が多い。自分の言動を客観的にとらえながら行動する自己統制力や現実吟味・検討力の弱さがうかがわれる。

表2 ロールシャッハ・プロトコル

No. Time Position	Performance Proper	Inquiry	Scoring
I ① 8" 八	チョウチョ	① 全体的な形, ぱつと見て。頭, 羽, 胴体の部分。	W F± A P
② 18" 八	コウモリ	② 羽を開いている。黒いし, ここに前足が。	W FM±FC' A P
③ 30" 八	お面	③ 白いところが目, ここが口。全体的な形と目と口の形から。	W,S F± (Hd)
④1'01"八	キツネ	④ キツネの顔の部分。鼻と耳の形から。	D3 F± Ad
⑤2'28"八	蛾	⑤ 触角? 全体的な形, 羽や胴体は蝶と同じだが, きたない不吉な感じ…色が嫌。こうして (手で掬う仕草) 逃がしたい。	W FC± A P'
2'40"	それくらい。		
add. 八	ここの部分に、雪だるま?…いや、赤ちゃんの顔が。何かの陰から顔を出しているような赤ちゃんが。		dr FK± Hd
II ① 13" 八	象	① 鼻が上を向いていて、象が立って遊んでいる感じ。かわいさ感じ。	D1 FM± A P
② 58" 八	子宮…子どもが生まれてこようとするところ	② 白いところが子宮, ここが生殖器。〈子どもが生まれる?〉何となく。〈赤い部分も?〉いいえ。	S,dr FC'±m Sex
③1'08"八	人間の足	③ ここのところ。足首とふくらはぎの部分。形と色。ふわっとした色合いから。	D3 FC±Fc Hd
④1'32"八	ランプ	④ 白い部分と上のところ。白い笠のランプが上から釣り下がっている感じ。	S,dd FC'±Fm Obj
1'40"	それくらい。		
III ① 5" 八	女の人が二人	① 女の人がおしゃべりをしながら洗濯しているみたい。〈女の人?〉格好や体つきから。	W M± H P
② 13" 八	炎	② ここが、何となく。色の感じから。	D1 CF± Fire
③ 22" 八	人の顔	③ 人というよりピエロ。目, 鼻, ここが口。	W F± (Hd)
④ 58" 八	洞窟	④ ここにトンネルのようなものがあって, 歩いていけそうな感じ。入っていても先から出てこれそう。	dr FK± Lds
1'28"	それくらい。		
add. 八	人が落ちてきている。短いスカートをはいて、足が細い、女の人。		D1 Fm± H
add. 八	動物の顔, ここに。熊かな。目と鼻。		dr F± Ad

IV	① 55" ^	動物の剥製	① 動物の動物。表面の毛の感じや形から。	W Fc± Aobj P
	② 1'13" ^	背の高い人を見上げた感じ	② 足、上には顔。すごく背が高い人が毛羽立った毛皮のコートかマントを着ているのを見上げてる感じ。	W FK±Fc H
	③ 1'45" ^ 2'05"	雲 それくらい。	③ 今にも雨が降りそうな暗い感じ。入道雲。	W KF±FC' Cl
add.	^	ここが骨。太くてごつごつ。脊椎。黒っぽいし、死んでいる動物の骨のよう。	D1 C'F±cF A.Atb	
V	① 13" ^	チョウチョ	① 羽を広げた蝶。お尻、触角。	W FM± A P
	② 25" ^	背中合わせで寄り添う二人	② ここに人の横顔が。胸のところで手を組んで、足を投げ出し二人で背中合わせ。	W M± H
	③ 1'15" ^	狼	③ 狼の顔。口を開いている。(狼?) 口の形が似ているから。	D1 FM± Ad
	④ 1'40" ^ 1'50"	コウモリ。 それくらい。	④ コウモリ。全体的な形。特に羽と足の形から。	W F± A P
VI	① 30" ^	虫	① 目があって、虫の顔のような感じ。(顔だけ?) このへんが虫の体(どのような虫?) わからない。	dr F- A
	② 45" ^ 1'25"	三味線 それくらい。	② 全体の形。押さえるところ。三味線かギターか。	W F± Music
VII	① 15" ^	兎	① 耳があって、ここが胴体で、しっぽ。形から。	D2 F± A P
	② 22" ^	女の子	② ポニーテールの女の子。二人で遊んでいるみたい。	W M± H P
	③ 60" ^	鬼の顔	③ 上から睨み付けているような怖い顔。角があるので鬼。	D4 M± (Hd)
	④ 1'30" ^ 2'10"	洞窟 こんなところ。	④ 先があるような感じ。ここから入ってあそこが先。	d1 FK± Lds
VIII	① 8" ^	花	① 形と色合いが花のよう。	D2 FC± Plf P
	② 18" ^	熊	② 熊が崖つぶちをよじ登っている。落っこちそう。	D1 FM± A P
	③ 25" ^	魚の骨	③ このへんの形。(魚というのは?) なんとなく。	dr F± A.Atb
	④ 1'15" ^	砂時計	④ ここの部分。(色も?) はい。(砂は?) もう下に落ちた。	dr FC±m obj
	2'15"	もうそれくらい。		
add.	^	胎児がうずくまっている。目がある。丸っこくてつるつるとした感じから。	di M±Fc (H)	
add.	^	人の手が見える、ここに。這い上がろうとしている人に差し伸べられた手。持ち上げてくれそう。	dd M± Hd	

IX ① 40" 八	建物	① 塔のようなもの。下が敷石、真ん中にすうっと塔が立っている。	D6	F \mp	Arch
② 1'20" 八	動物の顔	② ここに。目があって鼻、口。	D1	F \mp	Ad
③ 1'50" 八	噴火	③ 炎、聖火の炎が燃えている感じ。色合いがゆらゆらと。	D3	CF \mp m	Fire
④ 2'05" 八	噴水	④ 色合い、水がうわーっと噴出している感じ。火の側に水があっておかしいけど。	D4,S	CF \mp m	Na
2'30"	そんなところ。				
add. 八	てっぺんのところに橋が架かっている。〈どのような?〉つながっている感じ。		dr	F \mp	Arch
add. 八	ここに恐竜がたくさん。こちらから向こうの方に集まっていく感じ。〈何匹くらい?〉7~8匹。続いて歩いている感じ。		D2	FM-,FK	(A)
X ① 60" 八	サングラスと髭のある顔	① 細い顔をした人。ここがサングラス、髭。	D4	F \pm	Hd
② 1'12" 八	ゴキブリ	② 色と形。体や足の部分がよく似ている。	D9	FC \pm	A
③ 1'20" 八	赤ちゃん恐竜	③ かわいい赤ちゃん恐竜。色合い、ふわっとした感じ。	D2	FC \mp Fc	(A)
④ 1'42" 八	外人の顔	④ ここが目、髭、髪。髪の毛がカラフル。外人の顔。	D14	FC \pm	Hd
⑤ 2'40" 八 2'55"	虫に襲われる人 そんなところ。	⑤ いろいろな虫に食いつかれて襲われている人の顔。	W	Fm \mp	Hd

表3 スコア集計表

R(total response)	47	W : D	15 : 21	M : FM	6 : 6
Rej (Rej / Fail)	0	W%	32%	F% / Σ F%	30 / 89
TT (total time)	20' 58"	Dd%	19%	F+% / Δ F+%	50 / 62
RT (Av)	2' 06"	S%	4%	R+%	55%
R _i T (Av)	24.7"	W : M	15 : 6	H%	32%
R _i T (Av.N.C)	24.2"	M : Σ C	6 : 6	A%	34%
R _i T (Av.C.C)	25.2"	FM+m: Fc+c+C'	9.5 : 8.5	At%	4%
Most Delayed Card	X (60")	VIII + IX + X / R	36%	P (%)	11(23%)
Most Liked Card	VIII	FC : CF+C	6 : 3	Content Range	12
Most Disliked Card	IV	FC+CF+C: Fc+c+C'	9 : 8.5	Determinant Range	11

(7) イメージカード

最も好きな図版はⅧ（「懸命に這い上がろうとしているところが好き」）、最も嫌いな図版はⅣ（「色も形も暗いから」）を挙げ、父親イメージ図版はⅨ（「優しい感じのところ」）、母親イメージ図版はⅧ（涙ぐみながら「手を差し伸べてくれているところ」）、自己イメージ図版としてⅢ（「おしゃべりしているところが明るいときの私という感じ」）とⅤ（「疲れたときの自分。もたれかかっている姿勢が」）を選択した（括弧内は被験者の説明）。

4 考察

(1) ロールシャッハ・テストの総合所見

慣れない場面では幾分緊張するものの、物事に真面目に丁寧に取り組もうとする人である。常識的な思考・判断が可能で、葛藤や不安がなければ大きく逸脱することはない。受容的な環境下では徐々に緊張は解け、自由な観念・空想力を展開できる。知的水準は普通域で、創造性は豊かである。人への関心が強く、共感性・感受性は豊かに備え、温かく心地よい関係を求めている。ただし、依存的な気持ちが高まると、自他の境界があいまいになりがちである。また、情緒面は比較的安定しているが、外圧や周囲の視線に敏感であり、強い脅威を感じると萎縮しやすい。物事を具体的に捉え、処理する人であり、全体的・総合的に把握したり系統立てて課題解決したりすることは苦手である。目に留まったものに捕らわれると、そこから離れられなくなり、自分の思い込みやその場の雰囲気流されてしまう傾向がある。

総じて内的資質は豊かであり、ある程度の自我の強さも保たれていることから、心理療法によって、不適応状態の改善を図ることが期待できると考えられる。

(2) PTSDとの関連

PTSDのロールシャッハ反応については、Sloanら（1995）がペルシャ湾岸戦争から帰還した軍人の反応特徴をまとめている。それ

によると、①総良形態反応率（R+%）の低さ、②純粹形態反応（F）の低比率、③（M+ΣC）< {FM+Σ（m+c+C'）}、④非生物運動反応（m）の多さがあげられている。

また、久留ら（1996）は極度のいじめを機に発症したPTSDの事例についてロールシャッハ・テストを通して心理治療経過を分析し、①F+%の低下、②人間運動反応（M）や人間反応（H）の少なさ、③FC<CF+C、④カラーショックなどの特徴を報告している。

村山（1997）は、肉親の死により発症したと思われるPTSD事例のロールシャッハ反応から、①F+%の低さ、②FC<CF+C、③カラーショック、④mの多発等の特徴を挙げている。

一方、田澤（1999）は、性的虐待による外傷体験の後遺症について、ロールシャッハ・テストを用いて考察している。その結果、①モザイク状結合反応（識別的な形態と不定形態がモザイク状に結合した反応）、②様々な陰影反応、③m反応、④ブレンド反応（色彩と濃淡の複合反応・濃淡の複合反応など）、⑤非現実的反応等が出現していることから、長期反復性の外傷体験が認知構造の未発達を引き起こしたと結論づけている。

本被験者の反応結果を上記の諸研究と比較すると、①F%の低さ、②mの多さ、③R+%の低さ等が先行研究で指摘された心的外傷後ストレス障害（PTSD）の反応特徴に一致した。このことから、本被験者は外界の刺激に対して起こる主観的な反応をうまく統制できずにおり、自分の意思に基づかない外からの圧力を感じ、内的不安を高めており、ここにPTSD特有の心性が示されていると言えよう。

(3) DVとの関連

無彩色反応（C'）や陰影反応（FcやFK）の出現とその説明「きたない不吉な感じ」（I-⑤）「死んでいる」（IV-add.）などから、抑うつ気分、不安・緊張の高さがうかがわれる。また、人間運動反応（M）は、ほとんどが二者間の協調・依存的関係を示すなど温か

い対人関係を求める一方、人間や動物（非現実的人間・動物を含む）の顔反応（Hd・Ad）の多発から、対人緊張や対人不安の強さ、他者の視線や評価への敏感さ等が見て取れる。顔反応の多さは人間関係における不安（高橋他、1981）や、対人関係の未成熟（片口、1987）を表す指標とも言われており、本被験者の対人関係のあり方を示す反応特徴の1つと考えられる。さらに、「睨みつけているような怖い顔」（VII-③）「虫に襲われる人の顔」（X-⑤）など迫害的な反応、「何かの陰から顔を出しているような」（I-add）という羞恥表現、「子宮」（II-②）で出現した性反応（Sex）などには、強い恐怖感や被害感、性的不安・葛藤を内在させていることが示唆される。

以上の特徴は、DV被害の長期回復によって、絶えず何かに脅えるような生活を強いられてきた本被験者の心理的状态に強く関連している反応と考えられる。

(4) 本被験者の心理的援助の手がかり

特殊部分反応（Dd）が多いことから、本被験者は物事のとらえ方が具体的であり、目に留まったものに捕らわれやすいことがわかる。その傾向は、特に質問段階でのadd.反応に多く見られた。ロールシャッハ・テストの検査場面では、自由反応段階が被験者主導で進行するのに対し、質問段階では検査者の介入や検査者との相互作用の中で進められる。add.反応の多発は、受容的な環境下で防衛が緩むと、状況や感情に支配された反応が抑制なく自由に展開されていく被験者の行動傾向を示唆するものと考えられる。したがって、支援場面ではできるだけ全体的な視野に立った関わりや助言を心がけるとともに、援助者への依存感情を必要以上に引き出さないような配慮・枠付けが重要となるであろう。

一方、感情統制力の安定、内面の創造力や空想力と外界への関心や感受性の良好なバランス、十分な公共反応が示す潜在的な適応能力、微妙な陰影から細かい外界の刺激や状況の変化に気づく感受性などは、被験者の内的

資質の豊かさや、症状の改善や適応力の回復を支える自我機能の強さを表している。イメージカードに見られたように被験者と原家族（実父母）との関係は、比較的良好であったと推察される。DV被害に遭遇する以前の被験者の基本的パーソナリティが健康で安定しているのであれば、その部分を支持する心理療法の効果が期待できる。

なお、DV被害女性の臨床上の特徴の1つとして「面接場面での話のまとまりの悪さ」が指摘されている（加茂、2002）。この特徴を本被験者のロールシャッハ反応と関連させて考えると、PTSDの反応特徴でもあったR+％の低さはDV被害の影響を受けている可能性があり、そうであれば、PTSD症状からの回復にともない現実検討力の改善も期待できるであろう。

(5) まとめ

検査結果を総合し、本被験者の回復のためには、まず安全感を確保し、外部からの刺激を減らした上で、枠付けされた環境下で心身の安定を図り、健康な部分を支持しながら、主体性を取り戻す支援を継続させる方策が適切であると考えた。面接過程の第3期以降、上記の方針で本被験者への心理的援助を継続し、回復と自立を果たせたことからすると、心理査定に基づいた今回の援助方針は有効であったと言える。

本稿では、DV被害女性の心理的状态の理解や援助方針策定にロールシャッハ・テストを活用し、ある程度の有用性を見出した。ただし、検査結果が示す特徴のうち、変化可能性のある反応（DV被害の影響、PTSD症状との関連）と、不変な反応（被験者本来の人格特性）とを明確に区別して論じることは困難であった。事例を蓄積するとともに、再検査の実施などで変化・回復過程をテスト結果と照らし合わせながら詳細に検討することは、今後の課題である。

文献

- American Psychiatric Association 2000 *Diagnostic and statistical manual of mental disorders*. 4th edition. Text Revision. (高橋三郎・大野裕・染矢俊幸訳 2002 DSM-IV-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル 改訂新版 医学書院)
- Asukai, M., Kato, H., Kawamura, N., et al. 2002 Reliability and validity of the Japanese language version of the Impact of Event Scale-Revised(ISE-R-J) :Four studies of different traumatic events. *Journal of Nervous and Mental Disease*, 190(3), 175-182.
- 馬場禮子 1995 ロールシャッハ法と精神分析—継起分析入門— 岩崎学術出版社
- Herman, J. 1992 *Trauma and Recovery*. Basic Books. (中井久夫訳 1999 心的外傷と回復〈増補版〉 みすず書房)
- 久留一郎・餅原尚子 1996 極度のいじめを機に発症した外傷後ストレス障害 (PTSD) ロールシャッハ研究 Vol.38, 127-148.
- 戒能民江 2006 DV防止とこれからの被害者支援 ミネルヴァ書房
- 片口安史 1987 改訂新・心理診断法 金子書房
- 加茂登志子 2002 PTSDと診断されたドメスティック・バイオレンス被害女性の一例 ころの臨床 Vol.21, 235-238.
- 小西聖子 2001 ドメスティック・バイオレンス 白水社
- 小西聖子 2006 犯罪被害者の心の傷〈増補新版〉 白水社
- 村山治子 1997 肉親の死により発症したと思われるPTSDの一症例 ロールシャッハ研究 Vol.39, 45-60.
- Sloan, P., Hilsenroth, M. & Harvill, L. 1995 Rorschach Measures of Posttraumatic Stress in Persian Gulf Veterans. *Journal of Personality Assessment*, 64, 397-414.
- 高橋雅春・北村依子 1981 ロールシャッハ診断法 I サイエンス社
- 田澤安弘 1999 ロールシャッハ・テストからみた外傷体験の後遺症について アディクションと家族 Vol.16(3),386-404.
- 友田尋子 2005 DVとは何か In 新版ドメスティック・バイオレンスへの視点 11-39. 朱鷺書房
- 氏原寛 2001 ロールシャッハテストの基本 臨床心理学 Vol.1(2), 255-262.
- 柳田多美・米田弘枝・浜田友子・加茂登志・金吉晴 2004 ドメスティック・バイオレンス被害者の短期トラウマ反応とその回復 心理臨床学研究 Vol.22(2),152-162.

付記

事例の公表を承諾していただいた被験者A子さんと関係者の方々に、心からお礼申し上げます。

なお、本稿ではプライバシー保護のため、論旨に関係のない部分については、一部修正が加えられていることを付記します。

Rorschach Responses in a Victim of Domestic Violence

Hiroko IMURA

Abstract

Psychological condition in a victim of domestic violence (DV) was investigated using the Rorschach test. Results of the Rorschach analysis indicated that: 1) the pure form response rate (F %) was low, 2) the inanimate movement responses (m) was frequent, and 3) the total of positive form response rate (R+%) was low. These results correspond to characteristics of Posttraumatic Stress Disorder (PTSD) that has been observed by past studies. Personality characteristics of the DV victim investigated in this study and the possibility of her recovery were indicated by 1) frequency of unusual detail responses (Dd), 2) stable emotional control (FC>CF+C), 3) the ambiaequaler experience balance, 4) and appropriate popular responses (P). The relationship between DV and PTSD, the psychological condition in a victim of DV and effective psychological support for recovery from DV are discussed on the basis of the above findings.

Key words: domestic violence (DV), Rorschach test, PTSD